

## 「はじめに」から

野生動物学研究室教授 高槻成紀

筑摩書房から本を出すことになった。「ちくまプリマー新書」というシリーズで、ある日編集の人が野生動物のことを書いて欲しいという話を持ってこられた。私が2006年に書いた「野生動物と共存できるか」(岩波ジュニア新書)はおもいがけず好評で、いま4刷となり、本が売れない時代にあってはまずまずの売れ行きらしい。とにかく中高の入試の国語の問題として頻用される。それで「業界」ではよく知られているのだそうで、この話になったらしい。だが、私は編集の人に南さんとの共著にしてくれと無理を言った。予想はしたことだったが、よい返事はなかった。新書は単著が原則であるという。それは知っているが、私は言い出すと引かないところがあるので、強行に押した。結局相手が折れて南さんとの共著が実現した。

実は書名がまだ決まっていない。内容はポイントがいくつかあり、最重要なのは南さんがシカを深く知る研究をしたことと、私がシカを中心に植物などとのつながりを広く研究したことを対比的に示すことで、ひとつの動物が「立体的」に見えることを伝えるということにある。もうひとつは動物を好きということと、科学的にとらえることの違いをはっきりさせるということである。書いているうちに、うちの研究室のことを書きたくなった。それは動物のことをよく知るということ私たち研究者が書くのは当たり前だが、20歳くらいの学生がどういう体験を通じて動物をよく知るようになり、感動をもつようになるかを記すことで、若い読者に訴えるものがある

と考えたからである。かなり手前味噌になったが、文字通りほかにはない手作りの内容になり、私も気に入ったし、南さんも大いによるこんでくれた。研究室のメンバーがいろいろな形で登場する。以下はその本の「はじめに」である。

はじめに

私たちは動物の研究者であり、世間の平均値からすればかなり動物が好きなほうに属すといってよいだろう。南は京都の、いまいえば里山的環境で育ち、中学生のときに鳥の研究者の話をきいて動物の行動に興味をもち、大学では行動学を学んだ。高槻はいわゆる「昆虫少年」で甲虫や蝶の採集や飼育に熱中し、生態学というものがあることを知ってそれを勉強したいと思い、生態学のできる大学を選んだ。事情があって植物生態学研究室に入り、草食獣の研究をした。

思えば子供というのは多かれ少なかれ動物が好きなおものである。それが育った環境や何かにきっかけでほかのものに興味が移ってゆくことが多いが、私たちは少年の頃の興味をそのまま引きずっているといえるかもしれない。

ただし、私たちよりももっと動物好きな人はいくらでもいる。犬猫の愛好家は多いし、ペットとして熱帯魚やカメなどを飼っていて目がないという人も多い。最近ではバードウォッチャーも多くなってきた。動物好きという意味では私たちよりもこういう人たちのほうに軍配をあげたほうがよさそうだ。私たち

の共通点はそのことと同時に動物や自然のことを科学的にとらえたいという点にもあるように思う。科学的であろうとすれば事実を正しくとらえるということが最も大切になる。そのためにはデータをとる調査をしなければならぬ。野外調査はよい天気の日ばかりではない。雨の中、山道を踏みしめて歩くことも多い。忙しい日常の中から時間をやりくりし、協力者を集めたり、さまざまなリスクを乗り越えながら体力的にもきびしい作業をこなさなければならぬ。しかしそうした困難の末に明らかにされたものを目の前にしたときの喜びは何物にも代えがたい。この動物にはこういう生き方があったのだ、こういう訳でこういう形をしていたのだ、だからあそこに行ってよく草を食べていたのだ、ということが理解されたとき、その動物をただ「かわいい」とか「美しい」と感じていたときとはまったく違うすばらしさを知ることができる。また科学的であるということは、年齢や、貧富や、国籍などを超えた世界を共有することである。どんなに貧しい国の子供でもすばらしい発見をするチャンスはある。逆に豊かな国の偉い大学の先生でもデータ捏造すれば科学の世界では見捨てられる。そういう一種のフェアな世界である。したがって個人の利益とか欲得を越え、事実を知るために協力をすることができる。自然を理解するということは受験勉強のように勝ち負けではないのだ。お互いが知ることを喜びを共有できるということなのである。私たちはそうした科学的態度というものに魅力を感じてきたという共通点をもっている。

この本の読者は十代の若者と想定している。子供時代を卒業して自分の人生を考え始めている人がいるかもしれない。感受性の強い時

期だから、大人からみればささいなことに傷ついたり、悩んだりすることも多いに違いない。そういう豊かな感性を持った人たちに、私たちが見てきた動物について、それが見方によってどれだけ深く広い世界が展開するかを、体験に基づいて書いてみたい。若者を対象としているからといって手を抜いたつもりはまったくない。むしろそうであるからこそ、ことばを選び、わかりやすい表現に努めた。だが内容は必ずしもわかりやすいものではない。それは私たちがわかりにくく書こうとしたからではなく、野生動物を調べ、守るということ自体がたいへんに難しいことであるからだ。その意味では大人に読んでもらっても十分に満足いただけるものと思っている。

内容は1, 2章を南が、その他の章をおもに高槻が書き、それぞれが読み込んでときに大幅に書き換えたものであり、文字通りデュエットといえるものになった。ただし一人称で「私」ということがあり、その場合はどちらが書いたかがわかるようにした。

1章の本文はいきなりシカの詳細な記録から始まる。その意図は読み進んでいただければ理解されるが、私たちの研究対象であるニホンジカについてのそのような詳細な観察が必要であることを具体的に示したいと考えたからである。しかし本書はシカの教科書でないばかりでなく、野生動物の解説書でもない。そうではなく、私たちが伝えたいのは、どのような生き物でもよく見れば魅力的であり、それを正しく捉えるにはどうすればよいか、そうした理解こそが生き物に対する共感をよび、保全につながるのだということ伝えることにある。では、まずはシカの世界に踏み入ってみよう。

今の3年生が麻布大学に入学したとき、私も「入学」した。それ以来、入室前からつきあってきて、4年生になる年に研究室のこと、学

生のことを書いた本が出せるというのは実に幸せなことだと思う。今からその本を手にするのが楽しみである。